

オランダ共和國成立期のアムステルダム商業の一面

——バルト海貿易について——

栗原福也

ヨーロッパと植民地にまたがる世界最強のスペイン王國に抗して立ち上ったネーデルラントのうち、とくに北部七州は結束してよくフィリップ二世の支配から自己解放を成し遂げたばかりでなく、たちまちにしてヨーロッパの強國になった。政治的強國、オランダ共和國誕生の基礎は、共和國の中核をなすホラント、ゼーラント二州の目覚ましい經濟的興隆であつて、なかでもホラント州の經濟的中心アムステルダムは、十七世紀初頭には早くも世界的商港として立ち現れ、その強大な經濟力と財政力は共和國の政治的行動を決定し、そこで創始され、乃至は發達した商業や金融の制度・方法・組織と、その經

オランダ共和國成立期のアムステルダム商業の一面

濟的影響力は全ヨーロッパに擴つていったのである。

ところで、十七世紀前半におけるアムステルダムの商業を考察する時、アムステルダムの經濟的基礎構造を構築するものは、かつてそうであつた如く、依然としてバルト海商業・海運であつたことが明瞭になる。そして、このことは、オランダ共和國におけるアムステルダムの經濟的地位と役割を考へるならば、オランダ經濟の全體についてもある程度言ひうるであらう。^(補註)

しかるに、アムステルダム、あるいはオランダのこの時代における經濟的繁榮を語るに際し、人は直ちに東印度會社について、あるいは植民地貿易について述べる。勿論、東印度會社こそは、當時のオランダの經濟的隆昌と擴大の集中的な表現であり、巨大な商業資本と高度に

發達した企業形態のシムボルであつて、植民地貿易があらゆる領域において有した絶大な意義は決して否定できない。

このような事態を前に述べた事實に照して考えるならば、オランダ經濟の在り方がそれ自體として問題である場合において、そこで植民地貿易以外の要因がやゝ過少評價され、その實質よりも意味によつて、具體的構造よりもコンベンション^三ナルな觀念によつて規制される危険がないであらうか。主として十七世紀前半のバルト海貿易を取り扱う本稿は、オランダ經濟史の研究に全く未熟な筆者の感じた、このような甚だナイーブな疑問を述べようとしたものすぎない。

二

ネーデルラントにおけるドイツハンザの研究からその學問的生涯を始め、ハンザの活躍を中心とする北歐商業史研究に輝かしい業績を示し、かの Niederländische Akten und Urkunden zur Geschichte der Hanse und zur deutschen Seegeschichte. (1558—1669) なる史料集^二

巻を編纂して、ネーデルラントの經濟生活の熟知者たるルードルフ・ヘプケがその晩年に當つて、「經濟圈」Economic Landtschaft なる概念を理論的武器としながらオランダ經濟の成立に與えた展望は、オランダ共和国成立期に至る北ネーデルラント地域の經濟生活發展の統一的把握と構造的理解の最初の試みであつた。^一 アムステルダム^一の經濟發展におけるバルト海商業及び海運の意義はそこに見事に示されている。すなわち、マース河と二灣の間の地域は十二・三世紀には農牧生産物を取引していたが、南にフランドル、ブラバントの機業地を、東に北ドイツハンザの商業圏を控えた地勢上、十四世紀に入るとその經濟生活に大變化を生じた。すなわちライデンを先頭にハーレム、アムステルダムに毛織物工業が、またデルフトを初めとしハウダ、ハーレム、アメルスフォールトにビール醸造業が發達し、ホラント州は多數都市の繁榮する地帯となつた。人口の増大・ことに漂白に非常に多數の勞働力を要する機業都市の人口密度の増加は著しく、宿命的に不足した食糧缺乏はいよいよ痛切な問題になる。こゝにおいて、バルト海からの輸入によつて

全ホラントの穀物需要を確保するという極めて重大な役割を果たしたのがアムステルダムであった。しかしアムステルダムが單獨でこの役割を果たしたのではない。大商港都市としてのアムステルダムは、市の北方に隣接するワールラント地方の多数の海運業を営む都市・村落と密接な協業關係にたっていたのである。〔臺灣以北の主要都市であるホールン、エンクホイゼン、メデムブリックなどの西フリースラント諸都市が海運都市としてこれに参加する。すなわちアムステルダムの商業、ワールラント及び西フリースラント諸都市の海運という分業に基く大きな「經濟圏」が成立し、この地域が全體として、ホラント州への食糧供給の機能を果たしたのであった。

一四二八年—一五七二年の凡そ一五〇年間に、南北ネーデルラントはブルゴニー、ハプスブル両家の統一的な支配下にあつたためホラント州の生産物たる毛織物・バタ・チーズ（ビールはホラント州内で消費された）及び穀物・木材などの輸入商品は、當時の世界市場たるアントウェルペンやフランドル、ブラバントの工業地帯に最上の販路を見出した。その結果、カール五世の晩年・

オランダ共和國成立期のアムステルダム商業の一面

フィリップ二世の初期には南ネーデルラントの資本主義的産業的要素と北ネーデルラントの商業的、海運的能力が結合し、當時、英・獨・佛・スペインと比較にならぬ經濟的發展の可能性を有していた。有名なL・ギユイチャルデーニが *Descrittione di tutti i Paesi Bassi* (1565) を書いてネーデルラントの經濟的繁榮を讚美したのは、あつてもこの時期に當るが、早くも一五七二年にはこの「經濟圏」は反亂によって切斷され、その發展は挫折した。

「經濟圏」の問題はさておき、ホラント州及びアムステルダムの經濟發展に關するかくの如きヘブケの構想とそこに明らかにされたバルト海貿易・海運の重要性については恐らく異議ないであろう。問題はこのような北ネーデルラントの經濟發展が世紀末より十七世紀初頭のオランダの驚異的な經濟的隆昌とどのような關係にあるかという點である。これに關するヘブケの見解は *H. Baasch: Hollandische Wirtschaftsgeschichte, 1927.* に対する書評に最も明瞭に現われている。⁽²⁾ヘブケはそこで、バールシュがオランダ經濟史の敘述を一五七九年のユトレヒト同盟から始めているという一點にその批判を集中し、バ

ーシユによって見過ごされた中世及びハプスブルグース
 ベイン時代との連關は極めて強く評價さるべきで、凡そ
 一六〇〇年頃全く突然現われるオランダ經濟の隆盛は、
 明らかに十四—十六世紀に互るバルト海貿易と生産物輸
 出の有機的結合に基くこと、九十年代以後の發展はそれ
 以前の發展の *Ausbau* より適切に言えば *Wiederauf-
 bau* であつて決して *Neubau* ではないこと、オランダ
 經濟の基礎は九十年代以降も全く同一で、たゞインド洋
 への航行・植民地制度・取引所・銀行の如き若干の資本
 主義的要因がオランダ經濟圈につけ加えられたに過ぎな
 いこと、従つてオランダ經濟を連續性において捉えるべ
 きことを強調している。阿姆斯特ダムについても、ヘ
 プケは、それがワールテルラント・西フリースラントの従
 屬地域とともに商業・海運という傳統的な性格を大部分
 保持し、以前からの穀物・木材取引を依然續行し、それ
 にとゞ大規模な海上貿易をつけ加えたに過ぎないこと、
 傳統との斷絶は全く認められず、むしろ反對にその發展
 は全く特殊オランダ的業務に基いていたことを主張し
 た。⁽³⁾

共和國の成立を以つてオランダ經濟史の敘述を始めた
 バーシユはヘプケによつて、それ以前の經濟發展を過少
 評價したと批判されたが、それはバーシユが共和國の成
 立という政史的事件を重視する傳統的觀點または便宜
 的立場に立脚したためであつて、兩者の對立はヘプケが
 考ふる程に必ずしも基本的かつ本質的ではないとわたく
 しは考ふる。事實、バーシユは阿姆斯特ダムの經濟的
 繁榮の諸原因を述べるに際し、それ以前の經濟的發展を
 強調し、特に註記してブラーケルの所説に同意してい
 る。⁽⁴⁾

バーシユが典據としたブラーケルの見解は、著名な
*De hollandsche Handelscompagnieën der zeventiende
 eeuw*, 1908. の序説として述べられてゐる。そこで彼は、
 アムステルダムの繁榮が單にアントウエルペンの商業の
 アムステルダムへの移轉によつて生じたとする考えが正
 しくないこと、アムステルダムにおける商業と企業精神
 は多くの、とくに南ネーデルラントからの亡命者によつ
 て強い刺激を與えられたが、それにも拘らず、アント
 ウエルペンの商業がその頂點に達する以前にアムステル

ダムの發展の諸基礎は既におかれており、たとえアントウエルペンが没落しなくともその經濟的繁榮において匹敵したであろうことを指摘している。⁽⁵⁾しかしながら、この點に關しては、ブラーケルの著書の直前に出版された W. van Ravesteijn: Onderzoekingen over de economische en sociale ontwikkeling van Amsterdam gedurende de 16^{de} en het eerste kwart der 17^{de} eeuw, 1906. がより重要であらう。ラーフェスティンは十五世紀末より十六世紀初頭においてアムステルダム商業・海運業資本が「灣以北の海運諸都市、とくにワールラントを自己の勢力下におきつゝ、バルト海航行によつて、徐々にしかし着實に前進してゆく姿を、最初の綿密な實證的研究によつて力強く表現したが、こゝでわたくしは、彼の研究が、十五世紀末より凡そ一六二五年に至る期間を一貫して取扱っていることに注意を喚起したい。そして、そのことは、彼が第二篇において行つた十七世紀前半の若き共和國の中心における有名な自由派とカールヴィン派の黨争や、市參事會(Vredeschap)に關する興味深い社會構成史的分析にとつて、十六世紀初頭にま

オランダ共和國成立期のアムステルダム商業の一画

で遡つたアムステルダムの經濟發展の研究が有意義であり、かつ不可欠であると考へたことを示している。

「株式會社發生史論」及びその後の研究によつてオランダ經濟史に豊富な學識を示された大塚久雄教授もまた「アムステルダムを中心とする北ネーデルラントの經濟的繁榮は嚴密に言えば、必ずしも十六世紀末に突如として起つたものではなく、その端緒はおそらく十五世紀半頃」に始つたことを指摘されるが、それにも拘らず「アムステルダムが大をなすべき基礎は、すべてアントウエルペンの繁榮が頂點に達する以前から置かれていた」とするブラーケルの所説が正當でない⁽⁶⁾とされる。その理由は次のように要約できるであらう。すなわち一五八五年のアントウエルペンの陥落及びそれに續くスペインの壓力によつて北ネーデルラントに移住した南ネーデルラントの毛織物生産者によつて、南ネーデルラントのあの殷盛な毛織物工業が北ネーデルラントの原樹に接木せられ、今やホラント・ゼーラントの各地に異常なテンポで毛織物工業が展開され始めた。ところで一五八八年におけるあの「無敵艦隊」の撃滅という劃期的事件によつて

優勢なるスペイン艦隊を完膚なきまでに破摧して英・蘭二國の艦隊が大西洋の制海權を握るといふ情勢を背景として、兩國の商人はもはやヨーロッパ内部の取引のみに隔踏することをやめ自己の強靱な脚の上に立上り、公然と世界商業における制覇に躍進した。飛躍的に隆昌した毛織物工業の生産的基礎に立ちつゝオランダ人はスペインの西印度貿易の據點たるセビリヤあるいはカディスなる仲介基地を經由する密貿易によって西印度貿易の實質の大部分をその掌中に收めてしまったのみならず、更に直接にスペイン領西印度に赴き毛織物・黒奴などと交換に銀を入手し、更にその私拿捕船は密貿易と手をつなぎつゝスペインの銀艦隊を襲い、通商を破壊した。他方、一五九〇年代に設立された「先驅諸會社」に續いて一六〇二年に成立した「合同東印度會社」によって政府より東印度貿易の獨占權を與えられたオランダ商人は、早くもモルッカ諸島に確固たる商權を築き、あるいはジャワに據點バタヴィヤを確立し、東印度諸島に強固なる勢力を扶植して香料、なかんづく胡椒を輸入したが、それらと引換えに東印度へ絶え間なく送込まれたのはほかなら

ぬスペイン領新大陸産の「銀」すなわちあの西印度の密貿易において自國産毛織物の對價としてオランダ人がその手に收めた銀であった。以上に見たように大塚教授によれば、十七世紀初頭におけるオランダ經濟隆昌の基礎は、ホラント・ゼーラントに接木された南ネーデルラント傳來の毛織物工業という生産的基礎に立脚する世界貿易に基いていた。

さて、一六〇〇年の前後二・三十年間のアムステルダムの發達のテムポは眞に驚歎すべきものがあるが、それにも拘らず、その發達を連續的に理解すべきであるという所説の若干事例をやゝ冗長に紹介したのは、そのような謂わば連續性を強調しようとするためでは絶對になく、一五八五年以降のアムステルダムの商業活動においてバルト海貿易・海運の有する意義は植民地貿易に比して決して輕視できぬ比重と役割を持つていたのではなからうかという疑問を感じたからである。かゝる疑問が正當であるとすれば、毛織物工業を基軸として東西兩印度貿易の上に打ち建てられたオランダ經濟の構造を鮮かに浮彫的に畫き出された大塚教授の卓抜な構想力と鋭い問

題的理解に大なる畏敬の念を禁じえないが、他方、それと同時に、アムステルダムを中心とするオランダ經濟活動の全體をそれとして觀察し、表象しようとな念ずるものにとつては、バルト海貿易の實態の解明が重要な課題となるであらう。

植民地商業という大企業が要請する高度の資本集中を目的として組織され發達した東印度會社が株式會社發生史上、あるいは近代資本主義發達史上有する極めて大なる意義が注目された故に、東印度貿易が當時のオランダ内外に興えた怒濤の如き衝擊力と影響力の故に、あるいはその利害が政治的黨争と結びついた結果氾濫した東西兩印度會社をめぐるパンフレットによって、あるいはヘーグやバタビヤの文書館に蒐藏され、本國における會社本部並びに出先商館・政廳に關係あるあらゆる記録を網羅する所謂東印度會社文書と呼ばれるあの膨大な史料群の故に、またなによりも、東印度が引續いて自國植民地であつた故に、植民地貿易が早くより注目され研究されたに反し、バルト海貿易は有力商人の自發的個別的活動に委され、前者の獨占的組織的性格に對してむしろ自由

オランダ共和國成立期のアムステルダム商業の一面

の原則が支配的であり、したがって外地商館の一つさえ持たず、その結果史料も稀少であるために、目立たぬ存在であつたけれども、アムステルダム商業の現實を直視する時、その規模と意義は大きく浮び上つてくるのではないであらうか。たとえば、ヤンスマは十七世紀前半のオランダ商業の敘述を終るに當り、植民地貿易に關する一般的注意として、東印度會社の活動でさえ共和國經濟の全體におけるその意義を過重評價してはならぬこと、投資の面でも、その資本が常に小額に維持されたため東印度會社の意義は限られたものであつたこと、I. J. Brunsma の研究によれば東印度への航行船舶噸數はネーデルラント全船舶噸數の僅か〇・二%の小額に止まつた——その商品取引金額はもっと高率を示すにせよ——ことなどを述べている。

想うにラーフェステインよりヘブケに至る諸家の見解は、アムステルダム港を中心とするバルト海航行が十七世紀に入つても極めて活潑であり、かつ重要であつた事實を重視する結果その連續的な面を指摘しようとするのであり、その意味でその經濟史的認識の基本的視點は商

業に向けられてゐるに反し、大塚教授の視點は周知の如く毛織物工業に向けられてゐるのである。そして、このことは、前に述べた如く教授がブラーケルの所説を正しくないとして否定されたことと内面的關係があるであらう。しかしながら、基本的視點の相異はさておき、阿姆斯特ダムのバルト海貿易が如何なる規模と性格と内容を以って遂行されたかを問われねばならぬ。その前に、先づ J. E. Elias; *Vroedschap van Amsterdam* 1578—1795. 2 Deelen, 1903/5. に注目されてきた阿姆斯特ダム市政を支配する都市貴族のあり方とバルト海貿易の關連を以て考察するが、それはバルト貿易が誰によつて營まれたかについて示唆するであらう。

註

- (1) R. Häpke; Die Entstehung der holländischen Wirtschaft. Ein Beitrag zur Lehre von der ökonomischen Landschaft. Berlin 1928, S. 23 ff.
 (2) H. Z. 1929, S. 175 f.
 (3) R. Häpke; op. cit., S. 31.
 (4) E. Baasch; *Holländische Wirtschaftsgeschichte*. Jena 1927, S. 12.

(5) S. van Brakel; *De hollandsche Handelscompagnien der zeventiende eeuw*. 's-Gravenhage 1908, S. XI—XII.

(6) W. van Ravesteijn; *Onderzoekingen over de economische en sociale ontwikkeling van Amsterdam gedurende de 16de en het eerste kwart der 17de eeuw*. Amsterdam 1906. Hoofdstuk 1. Holland en Amsterdam in het begin der 16e eeuw. S. 1—44.

(7) 大塚久雄著「近代歐洲經濟史序説」上卷日本評論社・10頁。

(8) 同書・八二頁以下参照。

(9) バルト海貿易に従事する商人・船主が阿姆斯特ダムに於て「Directie van den Oosterschen Handel en Reederij」を組織したるは、十七世紀の末である。 Cf. Baasch, op. cit., S. 282.

(10) このことは、ロンドンの外地商館や冒險商人組合の staple 制度と比較するならば、オランダのバルト海貿易の性格を、むしろは英・蘭二國の外國商業の在り方の相違を示してゐる。 Baasch, op. cit., S. 325.

(11) T. S. Jansma; *De economische en sociale ontwikkeling van het Noorden*. (Algemene geschiedenis der Nederlanden. Deel VI. Utrecht 1953) S. 116. Zie J. S. Jansma. (VD) の註記を參照。 I. J. Brugmans の

研究とは、De Oost-Indische Compagnie en de welvaart der Republiek, in: TyG. fig. 51 (1948) blz. 225—231; Welvaart en historie (1950) blz. 28 ff. を指す。また、Diferree の計算によれば、おそく一六六七年までは、アムステルダム取引所における流通資本の3/4は、バルト海貿易に参加してゐた。Cf. V. Barbour; Capitalism in Amsterdam in the seventeenth Century, Baltimore 1950, p. 27.

(12) この時代のバルト海商業事情の殆んど唯一の史料たるズント海峡の通過税臺帳がバンダ女史によって公刊されたのは、今世紀に入ってからであつた。N. E. Bang; Tabel-ler over skibsfart og varetransport gennem Oeresund 1497—1660. Kobenhavn. 1. Deel. 1906; 2. Deel A. 1922; B. 1933.

三

一五七八年、alteratie と呼ばれる革命的事件の結果市政擔當者の交替が行われたアムステルダムは、以後經濟的飛躍に向つて新たな第一歩を踏み出したが、この期に至るネーデルラントの反亂の経過に示される、アムステルダムの政治的向背とその市政をめぐる市民の黨争との絡み合いの裡に、バルト海貿易の意義を窺ふことが

オランダ共和国成立期のアムステルダム商業の一面

でき、アルテラシーの歸趨を見究めることによつてそれ以後のバルト海貿易の發達を示唆することができると思ふ。

バルト海と西方をつなぐ海上通路を扼するズント海峡の通過税臺帳は近世初頭の北歐商業史に極めて重要な史料であるが、そこに示されたアムステルダムのバルト海航行船舶數は一五六九年に激減し、一五六九年に回復するまでの十年間は殆んど零に近い⁽²⁾。バルト海貿易・海運の極度の衰微を物語るこの船舶數の急減は、ネーデルラントのスペインに對する抗争において、アムステルダムがスペイン側に立ったため、アムステルダム船舶は當時沿岸海上に猛威を振つた反亂側の「海の乞食」に襲撃され事實上殆んど航行不能に陥つた結果であつた。こゝで反亂の経過について述べる違はないが、一五七二年以後反亂側はネーデルラント全域において極めて優勢であり、やがてガン條約が成立し(一五七六年)、ホラント州においてもアムステルダムを除く大都市は反亂側になつたのである。それにも拘らずアムステルダムが敢えて王黨としてカトリック側に留まり市の繁榮の基盤である海

上航行を犠牲にして顧みなかった事實は、當時の市政を牛耳る人々が、市民の最富裕層を構成し、市政に發言し參與すると當然考えられる海上貿易、なにかんづくバルト海商業を營む商人・船主らの經濟的利害を代表していなかったことを、また同時に、アムステルダム一般市民が他のホラント州諸都市に比してとくに舊教的色彩が濃いという事實がない以上、市政が決して一般市民の意見をも反映してはいなかったことを證するであらう。アムステルダム市政のかゝる特異性はどのように理解すべきであらうか。

十六世紀前半、對フランス戦争、デンマーク王位繼承への干渉などの世界政策が必然的に齎した損失を除けば、アムステルダムの商業的利害はカール五世の治策に非常に多くの被護と好意を興えられ、またカールの廣大な版圖に屬していたことよってアントウェルペン、スペインとの自由な通商に恵れたから、市民は本來皇帝に對し感謝の念を有していた。⁽³⁾しかし、反亂に際し市が最後まで王黨派の牙城となったのはそのためではなく、市の支配者團が中央政府と深い利害關係を結んでいたから

であつた。

アムステルダムの市參事會は一四七七年ブルゴーニュ公・カール豪膽公の死に乗じて、互選によりその缺員を補充する特權を獲得した。⁽⁴⁾このため市會は漸次比較的小數グループの大商人の封鎖的團體を形成し、市政の形態は高度に發達せる都市貴族制 *regenten-aristocratie* となり、とりわけ市長(四人)⁽⁵⁾及び代官 *schoutant* の五人が市政をろう斷するに至つた。⁽⁶⁾しかし、未だ社會的階級分化の度合の比較的低い小社會たるアムステルダムは、治者と一般市民の社會的差異は少く、また雇主と労働者との經濟的對立の激しい工業都市と異り、富者も貧者も商業・海運に従事する限り同一の經濟的利害關係を有するため、都市貴族制は市民の反抗を誘發するに至らなかつた。⁽⁶⁾しかるに、こゝに宗教的要因が兩者の對立激化の契機をつけ加えた。カールの治世前半には、屢々發布された新教禁止令にも拘らず、市當局はそれが政治的秩序維持を妨げぬ限り新教徒に對し寛容政策をとつてきた。しかるに再洗禮派の迅速な蔓延とともに市はネーデルラントにおける再洗禮派運動の中心となり、過激な教

説に熱狂した多数の男女が四周より市内に流入して暴動を起した。暴動は一日にして挫折したが、アムステルダム⁸のその後の歴史に與えた影響は頗る深刻であり長期に亘った。暴動参加者に對する徹底的刑罰はもとより、今や穩和な新教徒さえも嫌疑をかけられ、ブリュッセルの中央政府はこの機を利用して反攻を始め、新教禁止令の格守を命じ、異端に少しの苛惜もせぬ熱心なカトリックの新人を代官に任命し、その結果穩和派は市廳舎から排除され、保守派に有利な情勢となった。こうして市政に参加するサークルは一層狭められ一般市民、更には當然市政に與かるべき有力市民からさえ離れていった。

この間に新教、ことにカルヴィニズムは下層市民のみならず上流貴族階級にも多数の歸依者を獲得しつゝあつた。市政を獨占する人々は異端臭から自己を防禦するため絶えずより小さい圈内に閉ぢこもり、いよいよ寡頭的となり殆んど門閥支配にまで變質し、市民の支持を失い果ては自己の唯一の支柱として中央政府に依存せざるをえなくなつた。反亂直前における、このようなアムステルダム市政の實狀は、一五、六四年市政に反感をもつ上流

オランダ共和國成立期のアムステルダム商業の一面

階級市民によって中央政府に提出された陳情書に最もよく示されていると言われる。

ところで、市政が黨派的門閥によって占められ、遂にはその首領數名が實權を握って市會の意見さえ無視している現狀に激しい不滿を表明し、その改革を要求する陳情書を提出した人々こそは、ブルフマンズの注目すべき見解によれば、一五六七年に追放され處刑され、そして一五七八年後歸國して新市政を擔當したカルヴィニスト的心情の人々であつた。更に言えば、當時既にアムステルダムの力と精髓を形成したこれらの富裕商人達はバルト海の穀物取引によって、ドイツの宗教改革運動と絶えず接觸したのみならず大なる財産を集積した人々であつた。すなわちその信仰とともに財産を、彼らはバルト海貿易「*Oostersche negotie*」に負っていたのである。彼らの強大な經濟力はますますアムステルダム市場を支配してゆき、都市繁榮の酵母となつた。彼らは市政の門閥主義を非難したにも拘らず相互に密接な親戚關係を結び、市の寡頭的支配者團に對し社會的に鋭く對立した。

北方七年戰役において、一五六五年デンマークがズン

トを封鎖したことは失業及び食糧の騰貴と缺乏を伴って深刻な社會不安を惹起し、ネーデルラント反亂の諸要因を激發させる直接の原因となつた。⁽¹⁰⁾翌年、アントウエルペンに始つた偶像破壞運動はアムステルダムにも波及し、市民の革命的激情に恐れをなした市當局の無爲無策のために、市はアントウエルペンと並んで革命と反亂の據點となつて、全ホラントの新教徒會議が催され、武装し劔を手にした市民は當時市に姿を現わした反亂の貴族的指導者ブレードローデを總指揮官に任命した。しかるにオラニエ公がアントウエルペンよりドイツに向つて退去し、この機に乗じて中央政府勢力が回復された情況に失望してブレードローデまた市を撤退する。こうした事態に市長派の権力も確立し、改革派の全般的な亡命が行われ、續いて入市したスペイン軍による暴動者の詮議と處罰は慘酷を極め、市はこの時代 *mooddam* と呼ばれた。この亡命の中に陳情派の人々が含まれていたことは前述の通りであり、彼らの多くは以前より取引關係を有する國外諸港——エムデン、ブレイメン、ダンテツヒ、ケーニヒスベルグ——に移住した。富裕な大商人層の滅

少は市の經濟的繁榮にひどい損傷を與えた。これに加え、アムステルダムの商船・輸送船・漁船は沿岸においては「海の乞食」の跳梁に、北海においては當時スペインと險惡な關係にあつたイギリスの私拿捕船の襲撃に遭い、市の經濟的衰微と市民の窮乏は著しかった。⁽¹¹⁾一五七六年のガン條約において連邦議會はアムステルダムに對しホラント州會を唯一の正當な統治機關として承認し、オラニエ公及び州會に服従すべきことを規定し、全ホラント州に唯一の王黨派都市として孤立する市の支配者團を更に困難な事態に追い込んだ。アムステルダムが反亂側について商業・航行の自由を確保するのを妨害した最大の理由は、條約の規定に一五六七年の判決取消、逮捕者の解放、追放者の歸國、沒收財産の返還の條項が存したからで、その承認は直ちに市長 Joost Bryck 一派にとつて最強の敵對勢力の出現と自己の沒落を意味した。しかしながら、翌年永久勅令によつてスペイン側がガン條約を承認するや、アムステルダムもまたオラニエ公及び連邦議會に對する服従を迫られ、一五七八年遂に兩者の間に所謂 *satifactie* と言われる協定が成立した。サ

ティスファクシーはカルヴィニズムを容認したが公式にはなお舊教が採用されたことに不満と反感をもち、カルヴィニズムを支配的信仰にしようと欲する市民の聲は、日ましに市外及び國外より歸國する人々を併合して急速に増大した。のみならず歸還者の中にはかつて一五六四年、支配的な寡頭政治に反抗したアムステルダム(13)の舊指導者層、追放中の多くの艱苦に堪えてそのエネルギーを蓄え、視野を廣め、叡知を磨き、信仰を深め祖國愛を昂め來った陳情派の人々が存したことを忘れてはならぬ。彼らを中心とするカルヴィニストはホラント州會の指導とプランに従い、軍事的援助をえつゝ、市長一派への憎悪と革命的情熱の昂まりの裡に所謂「變革」を遂行した。市の指導者、高級聖職者、修道士はすべて追放され、直ちに三六人の市參事會員、市長が選出され、代官及び司法官 *schepenen* が任命され、アムステルダムの歴史は輝かしい未來に向つて巨歩を踏み出したのであった。(18)

變革以後、アムステルダムの飛躍的な經濟發展の契機となつたアントウェルペンの没落までに、市は經濟的荒

オランダ共和國成立期のアムステルダム商業の一面

廢と商業の不振から完全に立ち直りをみ、反亂直前に至るまでのアムステルダムの經濟的上昇線は十年間の沈滞によつて切斷された後再び更に向上の一途を辿つた。(14) 變革によつて樹立された新市政の指導者團體の中心である陳情派の人々はバルト海貿易を再開し、世紀末より十六世紀初頭における市の驚異的な隆昌に寄與したのであった。

ラーフェステインはその著書に、當時の市政に參與した都市貴族の家系と略歴を採録してゐる。(15) それは、初期資本主義の時期に商業が財形成への如何に多くの機會を提供するかを、従つて當時のアムステルダム社會において商業の支配が如何に強かつたかを示してゐる。そこにみられる都市貴族の大部分は商人階級出身であり、現に商業を營んでゐる。これらの大商人の内、穀物・木材・鯨・オリブ油・鱈・チーズ・魚類の取引に従事する者が最も多く、次に多いのは、これらの輸入品を加工して販賣する商人(加里商人、オリブ商人、石けん商人、その他)で、ビール商人、毛織物商人、綿織物商人——これらは商人的性格よりも生産者の性格を強くもつていた

——が續く。第一のグループに屬する商品の殆んどがバルト海貿易の取扱商品であることは注意するまでもないのである。

十七世紀の前半の間にこれらの都市貴族的商人は次第に變貌してゆき、企業家的性格に代つて利子取得に生活の基礎をおく純粹の都市貴族的性格が現われてくる。一六一五年、市長 C. P. Hoofft は、かつて、彼らのすべてが商人であつたが今は一部分に過ぎないと述べており、一六五二年には、彼らが一人として商人でなく、海上に危険を冒さず、土地・家屋・公債を所有し、そのため海は失われつつあることを商人達は慨歎してゐる。⁽¹⁶⁾

註

- (1) 前註 (11) 参照。また D. Schäfer; Die Sundzoll-Listen, HGBll. 1908, 及び J. v. A. E. Christensen; Der Handelsgeschichtliche Wert der Sundzollregister, HGBll. 1934; Dutch trade to the Baltic about 1600. Studies in the Sound toll register and Dutch shipping records, Copenhagen en 's-Gravenhage, 1941 を参照。
 (2) 厳密に言えば、船籍がアムステルダムなのか、それとも船長の故郷がアムステルダムなのか明瞭ではない。メント通過税表の編纂者・ヘンツ女史やライオン・ヘムステインは前

者の「フラーケル (cf. Schiffsheimat und Schifferheimat in den Sundzollregistern, HGBll. 1915, S. 211 ff.)

「フリムテンヤン」は後者の立場をとる。しかし Sundzoll-Register の記載されたフリムテンヤンの「hiensted」を船長の故郷と考えるフラーケル、フリムテンヤンの意見が有力である。(cf. Jansma (V) S. 214)

(2) アムステルダムのメント通過船舶数は次の如し。一五六八年 (三三三)・一五六九年 (一三三九)・一五七四年 (二一)・一五七五年 (六)・一五七六年 (〇)・一五七七年 (四)・一五七八年 (四二)・一五七九年 (一一五)・一五八〇年 (一五一)。

(3) K. V. Hees; Niederländische Handels- und Finanzpolitik unter Karl V, Economisch-Historisch jaarboek, 1934, S. 154 ff. 参照。

(4) W. van Ravesteijn; op. cit., S. 170.

(5) H. Brugmans; Opkomst en bloei van Amsterdam. Anst. 1911, S. 60 ff. 参照。本著者 H. de Bussy, N. W. Posthumus による改訂版 (1944) 著者未詳である。一四七七年以後の市政の権限については J. Ter Goonw; Geschiedenis van Amsterdam, derde Deel, 1881, S. 353—422. が非常に詳し。

(6) ibid., S. 60.

(7) ibid., S. 63 ff.

(20) 上記書籍に A. J. M. Brouwer Ancher 及び J. C. Breen による家系研究がある。De Doelantie van een deel der burgerij van Amsterdam tegen den magistraat dier stad in 1564 en 1565, in BMHG, XXIV (1903) SS. 59—200.

(21) H. Brugmans; op. cit., SS. 67—70.

(22) F. C. G. Brühner; Die dänische Verkehrssperre und der Bildersturm in den Niederlanden im Jahre 1566, HGBll. 1929. S. 97 ff.; J. S. Jansma; Dordrecht wordt Geens. (Economisch-Historische Opstellen Geschreven voor Prof. Z. W. Sneller. Amst. 1947) S. 32 を参照せよ。

(23) T. S. Jansma; De economische opbloei van het Noorden. (Algemene Geschiedenis der Nederlanden Deel V. 1952.) S. 213. 以下 T. S. Jansma. (V) と略記す。

(24) H. Brugmans; op. cit., S. 95 ff. また十五世紀末より十七世紀三十年頃に及ぶアムステルダム富裕市民の家系を記録した Ravesteijn; op. cit., Bijlage V. SS. 272—362 を詳細に検討するならば、これに述べた経過と状況を更に明瞭に窺うことができると思う。筆者の計算したところによれば、記載家系總數七八(他に、これらの姻戚關係ある家系若干を含む)の内、「一五六六—七」年に亡命し…

オランダ共和国成立期のアムステルダム商業の一面

…「ある人は「歸還後市参事會員になり……」「一五七八年に市参事會員になり……」「歸還後……」と述べられている箇所は四四家系に及び、その内一二人は新教派の領袖乃至「海乞食」の指揮者と記されている。亡命者の凡そ2/3は商人であり、穀物商人が最も多い。國外亡命地についてはエムデン(五人)・ハムブルグ(一人)・デンマーク(一人)・マンチー(一人)が記されている。アムステルダムの衰微の十年間において、バルト海貿易の據點として殷盛を極めたエムデン(Cf. B. Hagedorn; Ostfrieslands Handel und Schiffart im 16. Jahrhundert, Berlin 1909, S. 324 ff.)アムステルダムのバルト海貿易商人が亡命地を求めたことは蓋し當然である。さて、これらの家系の他に、「一五七八年以後……」と記された家系や一五七八年以後市政に参加している家系もまた大體上に述べた家系と同一の立場にあったと考えてよければ、十七世紀初頭のアムステルダムにおける財産家の大部分は、一五七八年の「アムステラシー」によって勝利をえた人々であったことが分る。これに反し、王黨派であったことが明瞭に示されている家系は僅か五・六の家系(S. 286, 288, 336, 346, とくに、344)に過ぎない。

(25) H. Brugmans; op. cit., SS. 95—99. しかし、變革によつてアムステルダムの寡頭的貴族制は決して終つたわけではない。第一に一五七八年の變革に際して市参事會員の

互選というあの市政形態が依然温存され、第二に前述したように、陳情派自體強力な血縁的關係に立脚したグループだったからである。本来、初期資本主義期の社會にあって、封建的束縛を打破しつゝ、大規模な商業活動を通じて強力に資本蓄積を遂行してゆくこれら大商人層にとっては、自由主義的個人主義的原理よりも家族的門閥的行動原則が必要であつたと思われる。

(14) 反亂直前の一五六六年頃アムステルダム的人口數約三萬人は十年間に激減し、再び、もとの三萬人に達したのは漸く一五八五年頃であつた。van Dillen; Bronnen tot de Geschiedenis van het bedrijfsleven en het Gildewezen van Amsterdam. 1 Deel. 1512—1611, 's-Gravenhage 1929. XXXI を参照。

(15) Ravesteijn; op. cit. Bijlage V. を参照せよ。この附録はアムステルダムの富裕市民階級の出身、富の集積過程、すなわち如何なる職業により、如何なる速度を以て財の蓄積が遂行されたかを、またアルテラシーの前後における經濟發展の差異などを明瞭に物語っている。しかしながら、これらの記載事項はかなり不統一で、數量的表現を與えることには疑問が感ぜられるので、こゝではラーフェヌス・ティンに従つて以下の如き漠然たる印象を述べるにとどめらる。

(16) T. S. Jansma (VI) S. 138 ff.

四

一六〇九年、スペインとの間に十二年の休戦が成立する頃までにアムステルダムは國際的大市場としての確固たる基礎を築いた。巨費を投じて港灣を掘り下げ、運河を整備し、多數の倉庫を建設し、燈臺・海上標式を設け、水先案内者の養成を計り、ネーデルラント各地、ロンドン、ハムブルグ、ルーアンなどの外國都市との定期航路・郵便制度を開始し大商港としての施設は名實ともに備わつた。更に一五九〇年頃には海上保險制度が始められ、一六〇二年には史上有名な連合東印度會社が成立し、一六〇八年には取引所が設置され、更に翌年には所謂アムステルダム銀行、すなわち振替銀行 Wisselbank が設立された。なかならず最後の二つは市の商業及び金融活動の據點であつた。増大しゆく商品・貨物の集中は卸賣値段の成立を可能ならしめた結果、多數の商人は取引所において敏速に取引を營むことができ、かくて、Posthu-mus の發見した「相場表」の語るところに従えば、そこで取引された商品の種類は實に三百を越え、またそこで

成立した価格はアムステルダムで通用したのは勿論、ネーデルラントを越え全ヨーロッパに影響を與えた⁽²⁾。他方、十七世紀初頭の歐洲諸國においては、中世以來の非合理的貨幣制度、すなわち金銀兩本位制、國家間の金銀比價の不等、自由鑄貨制などによってグレッツシャムの法則がまさに典型的に貫徹した。アムステルダムもまた決して例外ではなく、良質鑄貨は兩替商などによって隠退藏され流通過程から消失してゆき深刻な貨幣不足をひき起し、商活動の支障に悩んだ市當局は、兩替銀行を設立して兩替及び取引の決済を監視し、通貨の混亂に秩序を與えかつ入超の際外國商人に良貨を提供しよう⁽³⁾と意圖し、續いて始められた預金銀行は、同時に貸付業務を營んで、小額の擔保・低利率で商人に資本を供した。アムステルダムにおいて銀行と取引關係を有することは商人及び企業家にとつて、信用をえる不可缺の要件であつた⁽⁴⁾。

さてアントウエルペンの没落後南ネーデルラントの富裕な商人は自由な商業活動の場を求めてアムステルダムに移住し⁽⁴⁾、多くのことにアントウエルペンで高度に發達した商業制度・商慣習や大規模の取引方法・企業精神

オランダ共和國成立期のアムステルダム商業の一面

によつて、それ以前のかなり傳統的なアムステルダムの商業技術に一大變化を生ぜしめ、同時に流入した資本は、アムステルダムを巨大な金融市場となした。その結果、商業資本の潤澤と貸付利子の低率による長期投資の可能性があらゆる面でアムステルダム商業の優越性を保證した⁽⁵⁾。それはまず、巨費を要する船舶、なかならずくネーデルラントが誇るあの嵩荷輸送に最適な *コルク* 船の建造を促進し、輸送費の低廉が決定的に有利に作用した穀物・木材・鹽・練の如き嵩荷取引の繁榮を齎し、又投資期間の長期に互る遠隔地貿易を容易にした。アムステルダムの商人はまた取引に際し、低利率の、したがって豊富に使用しうる資本を以つて安値の時期に商品を購入して貯藏し、賣手市場の時期を待つて處分した。そのために必要な多數の貨物倉庫の存在は、その港における夥しい船舶と並んでアムステルダム訪問者のひとしく驚歎するところであつた。ことに國內及び國外の需要に應ずる穀物の多量の貯藏によつて、あたかも市全體が穀物の一大倉庫の感があつた。彼らはまたこの資本力を以つて仲介者を經ずに生産者からの直接買付、先買によつて買入値段の

引下げに努力し、あるいは購入の際は手形及び現金で支拂い、販賣の際は一・二年の信用を與えた。かくて運賃の低廉、大量買付、自由な信用によってアムステルダムの商品の卸賣値段は生産地のそれと同一價格水準を維持しえたのであった。獨占的價格つり上げ、ダンピングによって競争者を排除したことは言うまでもない。

そもそも商品の規格が殆んど存在せず、輸送・情報の遅い當時においては、商品は一定の中心地に集積される後再び取引されることが不可欠であった。このような貨物集散地 *Stapelmarkt* の機能を果たしたかつてのアントウェルペンに代って、今やアムステルダムが前景に現われる。アムステルダムに貨物を送りつけた外地商人は、そこで速かに商品を賣り、支拂いを受け、その賣上金を再投資するために廣範な選擇のチャンスと與えられた。彼らは値上りを期待して商品を保管する場合、貯藏商品を擔保に容易に借入れができ、あるいは比較的低率の關稅によって、他都市への再輸出も保證された。加うるに、全世界の市況に關する精通した知識、商品の評價と分類の熟達、情報通の仲買・取次商、卸賣、信用、保

險、兩替、これらのすべてが十七世紀のアムステルダムに最高度に發達したのである。

アントウェルペンの商業が *Passiv* であり、その繁榮の多くを市内在住の外國商人に負う *Stapelmarkt* であつたに反し、上述のようにアムステルダムの商業の大部分は市民の手中にあり、かつその海外における活潑な商業活動に負つていたことは、アムステルダム商業の堅實な基礎を理解するうえに、とくに注意すべきであらう。更にたち入つて言えば、スネレルの述べる如く、アムステルダムの商業的繁榮は *aktiv* な自己商業と *passiv* な *Stapelmarkt* との幸福な相互補完的結合に原因したと言(6)えるであらう。東西商業路と大陸・イギリス間の通路、更に植民地貿易の航路を結ぶ地點に位置し、その上に多數の有能な船舶と熟練した水夫を擁するホラント、ゼーラントの地がアントウェルペンに代つて西歐世界における貨物集散地の役割を果したのもとより當然であつたが、アムステルダムがミデルブルフ、ドルトレヒト、ロツテルダムなどの有力な競争者を排除してよくその後繼者になりえたのは、バルト海・北海の貿易・海運及び

それによって蓄積された豊富な資本力のために他ならなかった。

十五・六世紀のオランダ人のバルト海航行については既に高村象平教授によって詳しく紹介されているので觸れる必要はないが、何れにせよ、ズント通過税表の示すところによれば、十六世紀前半においてバルト海航行のオランダ船舶数は過半数を占めており、ハンザに對する優位は歴然たるものがある。もっとも、この時代のオランダ船舶はハンザ取扱の貨物を積載したのであって、本來の商業は依然ハンザ商人の營むところであり、従ってハンザ（リユューベック）はなお東西商品取引の規制者としての舊來の優越的地位を保持したという主張も存在するので、船舶数のみの優位を以って直ちにバルト海におけるオランダ商業の支配的優越性を主張できないが、十六世紀の経過のうちに、商業資本の蓄積によってオランダの船主・商人は自己の計算においてバルト海貿易を營み、ひとり海運業のみならず商業にもますます進出したであろう。もう一つ注意すべきことは、アムステルダム

オランダ共和國成立期のアムステルダム商業の一面

ンへの仲立商業である場合においても、バルト海からの歸り荷の内穀物のみはアムステルダム港に下されたことであり、十六世紀の六十年代に、アムステルダムは既に西歐に並ぶ者なき穀物、ことに裸麥の市場になつていた。⁽¹³⁾

さて十七世紀に入ってもまたバルト海貿易は依然としてアムステルダムの Hoedernegotie であり、ズント通過税表はそれが更に一層アムステルダムに集中し、西フリースラント諸港の參與が減少したことを示している。そこには當然、當時行われた商業技術や企業組織の變革が影響を與えたであろうし、ことに大部分の商業活動がバルト海及び北海に限られていたアムステルダムによって、アントウェルペンより來住した商人がフランス、スペイン、ポルトガルとの取引關係を盛んにし、とりわけそれらの延長である地中海貿易が、九十年代に突如としてアムステルダムの穀物商人に廣大な販路を提供したけれども、バルト海航行の在り方、取扱商品に關しては、⁽¹⁴⁾總じて前代のそれと著しい變化は認められない。

冬期の終る四月一日頃、ホラント、ゼーラントの船舶

の大部分は底荷を積んでバルト海沿岸諸港に赴き、バルト海東部の東プロイセン、リフランドの穀物（裸麥・ビール用小麥・パン用小麥）、バルト海奥地、ノルウェー東南部の木材、タール・瀝青・亞麻・大麻などの造船材料を積荷として歸港した。⁽¹⁵⁾ 底荷には大體砂が用いられ、目的港附近で棄てられたが、その他に當時南ホラント、フリースラントで盛んに製造されたタイル・煉瓦が使用された。⁽¹⁶⁾ こうして年二乃至三回のバルト海航行が可能であった。しかしながら、その一部分は年一回の航行によってバルト海諸港間の三角貿易あるいは多角貿易のかなり複雑な取引活動を行った。彼らの視野の擴大に應じて貨物輸送距離はいよいよ大きくなり、あるいはスペイン、ポルトガルから鹽を積んで直接にダンテツヒ、ケーニツヒスベルグ、レファル、リガ、フィンランドへ航し、⁽¹⁷⁾ あるいはオランダの港から葡萄酒、毛織物、絹、植民地産物（胡椒・米・砂糖・印度藍・煙草）、鯨などの西歐産物を積み込み、バルト海においては事情に應じて適當な商品を購入し、時にリスボンに赴き、時に穀物値段の情報を待って、ジェノア、リボルノを訪れた。⁽¹⁸⁾ 鹽は、西方向商

品の穀物に當る極めて重要な東方向商品で、穀物の西方向輸出量に應じて鹽の輸出量も増減した。イベリヤ半島西北部、フランス西南岸から直接に、またはオランダ國內で精製して輸出された。西歐商品の内、オランダ國內の生産品は毛織物のみであるが、十七世紀前半における毛織物のバルト海向輸出の増加には驚くべきものがある。木材、鹽、葡萄酒、鯨、穀物は所謂嵩荷であるが、やゝ時代が下って一六七一年、これらの嵩荷取引は全オランダ船舶數の實に八分の七を必要としたのであった。以ってバルト海商業の重要性を思うべきである。

十七世紀前半のズント通過稅表において著しい現象は、前代に比してむしろ船舶數の減少していること——従ってバルト海航行に従事する船舶數の、乃至航行回數の減少——、及び船舶數、ことに穀物輸送量の變動である。しかしながら、前者については次表が示すように、漸次船舶噸數が増大した結果、船舶の全積載容量はかなり増加しているのであり（圖表參照）、後者については、穀物取引が生産地の作柄に、またとくに西南ヨーロッパの穀物需要度に規制されたためであった。

年	通過船舶數	100ラスト以上	30—100ラスト	30ラスト以下
1594	2,974	44	2,761	169
1595	3,056	63	2,795	198
1610	1,957	200	1,697	60
1611	2,137	238	1,815	84
1622	1,959	938	989	32
1623	2,109	1,002	1,091	16
1630	1,102	458	596	48
1631	1,546	716	804	26
1635	1,749	1,120	1,617	12
1636	1,440	1,008	1,414	18
1641	1,539	1,324	1,197	18
1642	1,412	1,254	1,136	22
1645	47	28	18	1

ズント通過税表以外に、バルト海貿易の事情を窺うことのできる別の史料が存する。一六四五年、デンマークがズント海峡を封鎖した際、オランダ艦隊は強力にこれを突破し、凡そ半ヶ年に亘って、オランダ船舶は勿論、他國船をも、ズント通過税を支拂わずに通過せしめた。これらのバルト海航行船舶はオランダの諸港において、

オランダ共和國成立期のアムステルダム商業の一面

海軍局 *boord van de admiraal* に *veiligeld* を支拂ったのであった。⁽¹⁹⁾ この *veiligeld* の徴收臺帳が示す九四五隻のバルト海航行船舶の内、積荷、目的地の明らかなのは六四五隻である。その内譯は、一七〇隻(鹽)、一六四隻(鯨)、一七五隻(その他)、一三六隻(底荷)である。同期の西方向航行船舶六八八隻の内譯は、三五五隻(穀物)、一六八隻(木材)、一八五隻(その他)であり、穀物船三五五隻の内二〇四隻はダンテッヒを出港した。更に、六四五隻のバルト海航行船舶の内アムステルダムのそれが三五九隻、西方向航行船舶七九三隻の内、アムステルダムのそれが五九〇隻で、穀物船二七三隻、木材船一三二隻であった。これに反し、アムステルダムを除く全船舶の内穀物船は六七隻、木材船は三八隻である。以上の數字はバルト海におけるアムステルダムの商業的地位と穀物取引の意義を明らかにするであろう。

バルト海貿易に關して更につけ加えるならば、十七世紀の前半に對スペイン戦争、三十年戦争を背景として、アムステルダムはアントウエルペンに代って急速に國際的な武器・軍需品市場に發展したことから、あの有名な

リエージュ出身の三人の巨大軍需品商の活躍の本據となり、彼らはスエーデンに鑛山採掘權をえ、製鑛所、大砲製造所を建設し、また國王への巨額融資によって鐵・銅・鉛の輸出獨占權を握ってアムステルダムに送りつけたのであった。⁽²⁰⁾ 彈藥原料(加里・硫黃・硝石)もバルト海よりの重要輸出品であった。

主としてノルエーより木材を輸入した北海航行は、バルト海航行より一層北部オランダに集中していた。従って北海の商業・海運の荷主・船主の大部分はアムステルダムに居住していたと考えられる。⁽²¹⁾ アムステルダム商業の外國との關係は、植民地は勿論、ドイツ西北部・ライン流域、イベリヤ半島、地中海、レヴァント、ロシアについて考察せねばならぬが、こゝではバルト海貿易のみで甘んじなければならぬ。アムステルダム市民のバルト海商業活動の具體的な在り方、經營の規模や組織や方法、あるいは船舶共有組合の問題、ことにバルト海諸港におけるアムステルダム商人の活躍の詳細についてもまた淺學の筆者にとって全く不明瞭であるが、十七世紀前半のアムステルダムのバルト海貿易の重要性、従ってま

たオランダ經濟において占めたその意義について多少とも明らかにすることができたとするは本稿の目的は一應達せられたとせねばならない。

最後につけ加えねばならぬことは、アムステルダム及びそれに指導されるホラント州會の對外經濟政策におけるバルト海政策こそバルト海貿易の重要性を最もよく示すものである。⁽²²⁾ かつて、バルト海沿岸地帯を以って自己の封鎖的獨占商業圈を確保しようとするドイツハンザとの激烈なズント制覇戰の結果、シュパイエルの講和(一五四四年)によってえたズント航行の自由が、オランダ商業のバルト海支配を決定的ならしめたのであった。西方よりバルト海への唯一の關門たるズントの確保はバルト海商權の維持のために絶対に必要であり、したがって全アムステルダム商業の生命を制する問題であった。かくて、アムステルダムのバルト海政策は畢竟ズント對策に他ならず、「ズントの鍵」de sleutels van de Sontを以ってバルト海航路を押し開く鬭争は、十七世紀前半のオランダ史上大なる地位を占め、またバルト海に眼を向けたホラント州と、他の六州なかんずく西方海域に利害關

係をもつゼーラント州の絶えざる抗争の原因となり、それを通じて、共和国に宿命的な分立主義的傾向を一層推し進めた。そして十七世紀前半の宗教的対立と戦亂の騒然たる北方政情を背景として展開されたオランダのズント確保策は、ズントを挟んで對峙するデンマーク、スエーデンの二國の勢力均衡を目指したと言ってよく、このため、四十年代に互るまでは主としてスウェーデン、ハンブルグ、ダンチッピ、ブランドンブルグ選挙侯と同盟してデンマークに當り、世紀半ばには、このようなズントをめぐる政治状況を巧みに利用してバルト海上に確固たる足場を築かんとするスウェーデンの権力政策の脅威に對抗してデンマーク及び北ドイツ諸侯・都市と結んだのであった。

註

(1) V. Barbour: Capitalism in Amsterdam in the seventeenth Century, Baltimore 1930, Ch. 1. Rise of the Amsterdam Market p. 11—42 参照。

(2) N. W. Posthumus: Inquiry into the History of prices in Holland, vol. I, Leiden, 1946, XIX—XXX はアムステルダム取引所の「相場表」Cours van negotie

オランダ共和國成立期のアムステルダム商業の一面

に關する種々の新發見が語られている。現存する最も初期のそれは一五八五年のもので、商品名は印刷、値段はインクで書かれており、次の一六〇八年のそれは全部印刷で三百種以上の商品を記載している。一六一三年より市當局の監督の下に定期的に發行された。その發見地は國內の他、ダンチッピ、ストックホルム、フィレンツェ、セビラ、ウィーン、ロンドン、ハーゲン、東印度に及んでいる。

(3) T. S. Jansma; (VI) S. 89 ff.

(4) アムステルダムの移住者數については J. G. van Dillen; Bronnen tot de Geschiedenis van het bedrijfsleven en het gildewezen van Amsterdam, 1, Deel, 1312—1611. 's-Gravenhage 1929. XXXIII—LXXX の詳細を極めた統計、表を参照せよ。他都市との興味ある比較を示せば、全移住數の内毛織物業に従事する者のパーセンテージは、一五九〇年—九四年の間にライデン四五・五%、アムステルダム九・九%、ミデルブルフ七・七%であり商人のそれはライデン一一・三%、アムステルダム三五%、ミデルブルフ四一%を占めている。以って織物都市ライデンの重要性と、アムステルダムの競争者としてのミデルブルフの地位を窺うる。(Jansma, (V) S. 227.) また一五七五年八月より一六〇六年に至る間の南ネーデルラント人移住者はアムステルダム全市民の實に三一%に及んだ。Dillen; op. cit., p. XXVII.

一橋論叢 第三十三卷 第四號

- (5) 當時のオランダの貸付利率は三—四・五%である。比して、イギリスのそれは六—八%であったと言われる。V. Barboux; op. cit., p. 85 f.
- (6) V. Barboux; op. cit., Ch. V. Capitalism in Commerce p. 85, 103. 参考。
- (7) V. Barboux; op. cit., 21 f.
- (8) ノルマンディの商業については R. Ehrenberg; Das Zeitalter der Fugger. Zweiter Band. Jena 1922. 3. Aufh.; J. A. Goris; Etudes sur les colonies marchands meridionales. Louvain 1925.; O. de Smedt; De engelse Natie te Antwerpen in de 16^e eeuw (1496—1582) Erste Deel. Antwerpen 1950. など参考せよ。
- (9) Z. W. Sneller; Deventer, die Stadt der Jahrmakht, Weimar 1936. S. 123. を参照せよ。なお、クネマンは Eingenhandel への passiv な Jahrmakht の二概念を驅使して、クネマン市の商業に興味ある分析を行っている。
- (10) 高村象平「和蘭商業のノルト海進出に就いて」『三田學會雜誌』第三一—二號。同「商業革命時代のクネマン」同第三三卷入號。
- (11) 高村象平「商業革命時代のクネマン」六一頁参照。この見解は G. Mickwitz の發表したものと異なる。
- (12) 既に一五三七年の備給證書はこのような事情を明白に示している。J. Strieder; Aus Antwerpener Notariatsarchiven, Quellen zur deutschen Wirtschaftsgeschichte des 16. Jahrhunderts. 1930. SS. 93—96, no. 102 (1537. Mary 16).
- (13) 十七世紀末、アムステルダム港への穀物輸入量は凡そ千石、〇〇〇ラット、市の自己消費二一、〇〇〇ラット、ちなわち七・五%を除き、残りの凡そ二九%が国内に、約四三・五%が外國、主としてイタリアへ販賣された。H. Brugmans; op. cit., S. 122.
- (14) ノルマンディの地中海貿易については H. Wäljen; Die Niederländer im Mittelmeergebiet zur zeit ihrer Höchsten Machtstellung. Berlin 1909. 参考せよ。最近版は F. Brandel et R. Romano; Navires et Marchandises à l'entrée du Port de Livourne (1547—1611). Paris 1951. には、一五九〇年代の初期にネーデルラントの地中海貿易が突如として盛んになったことが明瞭に示されている。すなわち、一五九〇—一五九一年に初めて、アムステルダムの穀物船一二隻が、翌年三七隻が、更に翌年二九隻が入港している。(p. 51) 更に p. 107 のグラフを参照せよ。
- (15) H. E. van Gelder; Zeslède-eeuwsche koopmans-brieven, in Eco.-Hist. Jb. 1919. S. 136—191. は其中で、本店より派遣されてダンチャッヒにある代理商が本國へ差し出した通信(一五八一年—一八五年)で、當時のノルト

- 海商業事情を窺ふの爲に作られた。
- (19) T. S. Jansma (VI) S. 98.
- (20) E. C. G. Brünner; Een excerpt uit Finsche toelagisters over de jaren 1559—1595, in Eco.-Hist. Jb. 1929, S. 185—217. を参照せよ。
- (21) それらの主要商品の取扱數量の減少は、E. Baasch; op. cit., p. 283 以下に述べらる。
- (22) その veiligheid 國家警察の監督は、G. W. Kernkamp; De sleutels van de Sont. Haag 1890, Bijlage I に於て述べらる。それ等は T. S. Jansma (VI) S. 99.; Brugmans; op. cit., S. 121 f. に於て述べらる。兩者の著定基準は、その差を参照せよ。
- (23) Elias Trip, Steven Gerard, Louis de Geer 及び V. Barbour; op. cit., pp. 36—40.
- (24) T. S. Jansma. (VI) S. 99.
- (25) オランダの外國貿易は、對イギリス、對フランス及び南ネーデルラント貿易は、ロッテルダムを中心とするアムス流域諸都市によつて行われた。
- (26) 詳細な經過に關しては、E. Baasch; op. cit., SS. 273—288. を参照せよ。

オランダ共和國成立期のアムステルダム商業の一面

(譯註) J. C. Westermann; Beschouwingen over de opkomst en den bloei des handels in de gouden eeuw, in Zeven eeuwen Amsterdam, onder leiding van A. E. d'Ailly. II. De zestiende eeuw, Amsterdam 1945. S. 79 以下に於て述べらる。Met recht, zegt Christensen aan de hand van een document uit 1646, heette de Oostzeehandel de moederhandel van Holland, „de siele van de gehele negotie, waeraen alle andere commercien ende trafiquen dependeren.” Hij was immers niet alleen de vroegste en voornaamste tak van groothandel, maar ook de aanbrenger van het belangrijkste voedingsmiddel der bevolking...Het is niet te verwonderen, dat de buitenlandische politiek van de Republiek in de 17de eeuw in sterke mate door de belangen juist van dezen handel bepaald werd; immers, hij schiep de basis voor de welvaart niet allen, maar ook voor de veiligheid en het bestaan zelf van den staat!